

# 京鹿子

昭和二十三年六月五日創刊  
平成二十一年一月一日発行  
定価九十九円（税別）

1月号

京鹿子祭特集号

初句会  
丸山佳子

九  
字  
切  
つ  
て  
合  
す  
白  
衿  
恵  
方  
む  
き

折  
入  
つ  
て  
お  
願  
ひ  
申  
そ  
注  
連  
の  
門

濠  
さ  
ざ  
波  
枯  
葉  
に  
あ  
ら  
ず  
亀  
泳  
ぐ

鳥  
な  
が  
ら  
越  
冬  
つ  
ば  
め  
誰  
が  
た  
め  
に





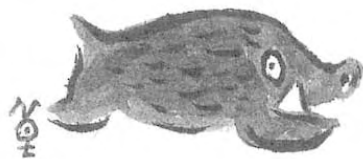
鼻 柱 目 鏡 で お さ へ 初 句 会  
懸 崖 菊 に 非 の う ち ど こ ろ 探 せ ど も  
裸 樹 に 仲 間 入 り す る 日 は 匿 名 で  
薄 も み ぢ に 入 山 禁 止 何 ゆ ゑ に  
山 眠 り カ ー ブ ミ ラ ー も 一 切 空  
春 を 待 つ お や 指 小 指 ま で そ の 気



豊 田 都 峰

清響集 その六十九

小鳥くる川合ふ響きこむる杜  
せんせんと川合ひせきれいつがひ飛び  
川すぢを秋半日の居どころとす  
木の葉ちるひとつは比叡より高く  
草紅葉影おく人のまた減りし  
読みすすむ次の頁らある夜寒



ざふすいや風が来てゐる裏山に  
汐の香に添へばひと夜は牡蛎づくし  
貴船菊瀬音はなさぬまま壺に  
秋のゆくひと日は逢坂関越えん  
ひとすぢの風おこしつ鷹渡る  
山紅葉ひとり占めする花頭窓  
はじまりの正面は旭の紅葉山  
銀杏黄葉そのひとひらはわがために

## 秀華採集

秋日傘まだ帆を張れる齡とも

山中 志津子

日傘は目立つ、それを少し恥ずかしくも思いながら街をゆく女心を巧みに表現している。いつまでも「帆を張る」若さをもってほしいと思う。

鹿垣のトタン鳴る夜も嬰太り

大槻 光枝

落人に一と夜の紅葉さらに濃く

伊藤 希眸

前句の「嬰太り」の取合せが抜群。育児の根源的風景めく。後句の、落人の不安の具象化がよい。

鈴鹿 仁

枯山吹

枯山吹はなやぐ頃の風想ふ  
やぶさかと謂ふ坂ありて名草枯る  
木の実降る齡重ねて丸くなる  
どんぐりの眩き愛の掌の中に  
格子風氣儘に通し走り蕎麦  
照紅葉赤を通して弥陀ごころ  
五条坂ちやわんの冷えにある奇才

近 詠

宇都宮滴水

溪もみぢ

もみぢ山句碑晩年の息深し  
凍天のほつえを支ふ落し羽  
人参のいろに味あり赤子泣く  
溪もみぢ紛れる風は持ち帰る  
落葉径ひと月まへの訃を憶ふ  
十二月古き栞のやぶさかに  
方言にはじまる一步雪をんな

神麓集



吉田 多美

幸せの角度で切られ西瓜食ぶ  
葉屋と馴染になりて鱚雲  
木の実独楽廻さば老の何時止まる  
野菊咲き笑みの戻りし石地蔵  
病む夫の目線のコスモスゆれやまず

悼・義兄笹岡幸雄 寝瓶 史

「灯親し」と笑みを浮かべて剣士逝く  
潮めく通夜人引きてそぞろ寒  
菊柩木太刀秘めたる顔寧し  
直会や長を覚悟のむかご飯  
中陰の札外されず神迎へ

奥村 鷹尾

草を刈る指のはざまをバツタ跳ね  
曾孫迄得たる旅好き老夫婦  
笹叢を刈れば清掃手に負へず  
涼風の立ち初む庭の作務絆天  
秋不順見へぬ目先の空景気

丹生をだまき

裏切りや白粉花おしろいの実はみな真黒  
香の移る合図の発火曼珠沙華  
シンデレラの馬車にはなれぬひねかぼちや  
逆光で撮りし夕景芒の詩  
時の流目に見せ秋思の砂時計

山田をがたま

健康のほか願ひ無し秋に入る  
一と月かけ体重もどし爽やかに  
秋晴れて独り歩きの出来る身に  
秋うらら若冲の白象に逢ひに  
秋澄みて江戸画の虎とにらめつこ

船越 美喜

鏡中に胸中あふれこぼれ萩  
別れたる人の面影秋の風  
碇泊の白き巨船や燕去ぬ  
惑星の一つ減りたり虫の夜  
秋の雨捨てず使はぬものの数



神麓集



我田引水守り通せし水落す  
高過ぎて届かぬ望み露寒し  
生く事は旅かも知れず敬老日  
遷都古る御所の宮居を萩が守る  
今日あるは四温の恵み敬老日

岩崎 憲二

なつかしき面ざしにある露のいろ  
石路咲いて日陰は憩ふ場にあらず  
引かれても干されても赤烏瓜  
単線の車窓晩稲の穂が低し  
さいはての海の届ける晩稲の穂

高木 智

枯蠟螂 柴田 朱美  
復元にこだわつてゐる枯蠟螂  
町医者にからかつてゐる枯蠟螂  
通し土間途方にくれた枯蠟螂  
枯蠟螂転がし切字が見つからぬ  
哀願の枯蠟螂に躓けり

病窓のどこか満たざる十三夜  
歩行捨てて秋雲に乗り天駟けたし  
病廊真夜案山子の梯が動きだす  
歩行練習秋陽の路地をひとめぐり  
秋蓄薇紅く笑みかく見舞籠

荻野 千枝

船つきしころの石垣花芙蓉  
白露かな曲るを知らぬ千年杉  
大絵馬の船のうすれし露しぐれ  
かなかなや城山に城なかりけり  
址どこも風の穂芒関ヶ原

高橋 千美

ナガサキ揚羽まぶたに重し北を指す  
見極めよナガサキ揚羽に弾流れ  
ナガサキ揚羽掙やぶりの羽使ひ  
幾世棲みいく代渡りぬナガサキ揚羽  
ナガサキ揚羽狭庭に迷ひきては舞ふ

伊藤 希眸

# 海道賞受賞作品抄

千葉県

直江裕子

既作

蝶よ木に掴まれ佐渡に日よ沈め  
しがらみのなければ藤は万の蝶  
粧ひし山のどこかに忍釘

新作

重ね着のいちばん下は思ひ草  
万緑やどこにふれても淋しい手  
まだ山を曳きずつてゐる通草かな  
花三日ものの境の淡く溶け

まんさくのぬくもりほどでよろしいの  
馬の字がくづれて青野走りだす  
父の木がいつぽん生えてゐる海市  
眠るたび陽炎になる小さき母  
桜餅居るべきはずの人遠く  
身を隠す手頃な木あり青葉騒  
くちなしの匂ひから咲く佇まひ

# 京鹿子大賞受賞作品

京都府

松本鷹根

作業着の着型乾しなる梅雨漁港

穂の葦の伸びきり揺れることで足る

とんぼうの風より軽く群れに生く

秋蝶の翅のたたみにある禱り

青田いま視野一枚の二尺丈

野菊には湖の雨粒太かりし

稲の花いま直立を折りとす

沖の波沖にとどめて湖時雨る

散りてなほ蓮は首を崩さざる

湖風に葦は背筋を固め枯る

帆を高くして新涼を占めて航く

耳鳴りす枯れにじんじん刻委ね

忘れもの探す目で追ふ冬の蝶

土筆出てなるべく湖近く坐す

湖へだて視界雪嶺のみとせり

犬ふぐり湖の視界は空になる

穂から枯る葦逆光の湖揚げ

鳶の笛風のひかりを湖に撒く

なみだ目となるまで冬の田に佇てり

花菜晴れいつでも消せる日課表

風花や離別のことば地に着かず

追ひ追はれ紋白蝶は沖を見ず

枯れ葦や色を混ぜれば暗くなる

桐の花遠く見つづけ雨になる

雪嶺の麓暮色を強ひられる

湖風の地に這うてゐて花南瓜

継ぐ子なし裏口に豆強く撒き

川落差ただ純白の梅雨仕立て

祝酒湖の朧に溶かしゆく

蜻蛉生る湖乳色の風に醒め

# 京鹿子新賞受賞作品抄

京都市

浜田栄子

建礼門の正面に来て梅雨明くる

矢印へ歩み速めし鱗雲

蟬穴を覗く平和な国に住み

大和三山冬日の中に定まりぬ

枇杷熟れて声よく通る下校の子

野菊咲き神話の国へ径直に

てのひらに折鶴一羽原爆忌

飛びたくて風待つ日々や糸のころ草

秋海棠こころととのふ雨の音

太夫墓へ晩秋蝶の舞ひ確か

石仏へ添ふ四五本の曼珠沙華

光悦垣のをとこ結びや花八ツ手

京鹿子新賞受賞作品抄  
京都市  
山 本 正

青 蔦 や 観 音 開 き の 雨 後 の 窓  
糸 と ン ば 葉 影 泳 が す 史 跡 の 碑

大 夕 焼 母 と 歩 き し 砂 浜 辺  
秋 桜 菩 薩 は ど れ も 湖 へ 向 く

湾 の 陽 の ふ と 力 抜 け 海 月 浮 く  
し じ み 蝶 湖 北 の 風 の 落 し 物

流 灯 会 追 憶 の 風 舵 を と る  
秘 仏 守 る 在 所 こ と ば や 秋 の 蝉

賑 は ひ を た た み し 露 店 青 葉 木 菟  
枯 芦 や 水 面 の 雲 に あ る 余 光

よ み が へ る 真 葛 原 や 蝉 し ぐ れ  
松 の 内 会 ふ や 楷 書 の 御 挨拶

# 京鹿子新賞受賞作品抄

京都市

## 鈴鹿けい子

秋燈オフエリアの死と須磨子の死

漢詩の軸男ばかりの初手前

蠟燭の届かぬ先に蜘蛛が跳ぶ

都鳥待ち人は来ぬ渡し跡

露しぐれ百目蠟燭ぐらり揺れ

廃校の日時計正午風花す

小倉山嶋を立たせて陵眠る

凍つる夜は星がまたたく少女の死

苛立ちを隠せぬ指や枯葦原

簪に黄菊白菊石塀あかり

昏睡夢それは花野の羊水湖

為せば成る水草紅葉のひとりごと

# 募集大作賞

福知山市

西村滋子

青鷹

初日の出杣家いつもの窓閉づる

天照らす芽吹き始めの峠みち

山ざくら昨日もけふも散る構へ

干し棹の白に集まる余り東風

天命の鬼とも知らず青こだま





# 京鹿子集

## 豊田都峰選

秋日傘まだ帆を張れる齡とも

露草の今朝のひかりにみちびかれ

鈴虫につられ身の上話など

ヴィーナスの生まれし雫星流る

かたりべの稗田阿礼もちろかな

鹿垣のトタン鳴る夜も嬰太り

秋彼岸老いて友みな足隔て

木耳や姥捨山へバス延びて

新涼や生れてすぐに亡ぶ雲

月代のコロツケ少し焦げにけり

京田

山中志津子

亀岡

大槻光枝

新蕎麦やつづらつづらに平家村

落人に一と夜の紅葉さらに濃く

叢雲の十六夜ならばなほ愛し

平家いま律呂の調べ秋澄めり

月に量隠れ里とは言ひながら

大蛇伝説綴りて窪の曼珠沙華

秋霖や飛鳥美人に黴の跡

南山の菊になぞらへゐて清し

指先に白桃の香の滴れる

歌垣の筑波は遠し桃を剥く

千葉

伊藤希眸

河内桜人